

【小松左京氏追悼エッセイ】「夢のよう」

伊藤致雄

受賞の時、編集者から電話がありました、「明日の夕方、小松先生と対談をして欲しい」（小松左京マガジン第20巻にその対談が載るのです）。

翌日、編集者と一緒に小松さんの事務所に向いましたら、丁寧な挨拶をいただき、大変に恐縮しました。もちろん初対面です。小松さんは年を召しており、見た目はお爺さんでしたが、お話はそれはまた大変に愉快で、わたしが知らないことを何十倍も知っておりました。大作家ですから、当然ですね。

当時、わたしの歳は63、小松先生は74歳でした。

酒席も談話もとても愉快。酒をたくさん飲みましたが、小松さんは秘書さんには禁酒と叱られました。蔭で、わたしのグラスの焼酎を「それ、こちらのグラスに足してくれるかね」。

「はい、ナイショで。ええと、日本沈没ほどのくらい年月が掛かったのですか？」  
「9年です」

あとのハナシはみんな忘れてしまいました。9年のことははっきりと覚えておりま

す。

そうそう、「筒井君は1週間で書き上げたそうだよ、まったく・・・」。

「ああ、日本以外全部沈没ですね」

そんなこんなと、6時から11時頃までの愉悦の時でした。